

【各論】『土芥寇讎記』の成立をめぐる一考察

——大名家の配列の比較検討から——

杉 岳志

はじめに

筆者は先のレポート集において『土芥寇讎記』に登場する大名の配列を元禄三年の武鑑と比較検討し、『土芥寇讎記』が内包する論理の読解を試みた（『土芥寇讎記』レポート——『土芥寇讎記』の作者は誰なのか——若尾政希研究代表『土芥寇讎記』の基礎的研究、二〇〇四年。以下、旧稿とする）。旧稿において指摘したのは、

・ 武鑑に比べて『土芥寇讎記』では甲府綱吉の位置づけが低い。これは將軍継嗣をめぐり、綱吉の意図を汲み取った結果ではないか。また、堀田正仲と本多家は格式に見合わない低い扱いを受けている。いずれも綱吉の意向を受けたものか。

↓『土芥寇讎記』には綱吉の意図が反映されている。
・ 主だった大名では側用人の牧野成貞のみが登場しない。

↓『土芥寇讎記』編纂事業は牧野成貞によって指揮されたのではないか。

という二点である。班の共同作業として作成した対照表から『土芥寇讎記』と『諫徳記後正』では大名の登場順が異なることが明らかなので、本稿では『武家諫徳記』・『武家勸徳記』・『土芥寇讎記』・『諫徳記後正』を題材に、大名家の配列の比較検討を行うことにしたい。『武家諫徳記』・『武家勸徳記』・『諫徳記後正』は諸本の存在が知られるが、本稿では『武家諫徳記』①は加賀市立図書館聖藩文庫所蔵本、『武家勸徳記』②は盛岡中央公民館所蔵本、『土芥寇讎記』は金井圓校注『土芥寇讎記』（人物往来社、一九六七年）、『諫徳記後正』は東京大学史料編纂所所蔵本を利用した。

一 一門及び二十万石以上の大名の配列

まずは各書の性格を大まかに把握するため、一門及び二十万石以上の大名に限定して検討することにした。該当する大名を一覧にしたのが表一である。大名名が本文と目録で異なる場合は本文のものを採用し、特に括弧で補うことはしなかった。位置関係を明確にするため、適宜間に空欄を入れて位置を調整してある。網掛けしてあるのが、先行する書から位置が下がった大名家である。

(一) 『武家諫徳記』と『武家勸徳記』

『武家諫徳記』と『武家勸徳記』の間では、会津藩保科家と松江藩松平家の位置が下がっている。特に保科家は『武家勸徳記』に比して『武家諫徳記』で高く位置付けられているが、これは秀忠の息子である保科正之が綱重・綱吉に次ぐ位置づけを与えられていたためだろう。松江松平家も代替わりをしており、『武家諫徳記』の松平直政（秀康の三男）と松平頼重（高松十二万石、頼房の長男）はいずれも家康の孫に当たることから純粋に石高での差となっていたのが、『武家勸徳記』の段階では水戸系の頼常に特別な地位が与えられたのだろうか。

整理をすると、『武家諫徳記』では①御三家②將軍の子息（綱重・綱吉・正之）③越前家直系の光長④その他主要家門という分類だったのが、『武家勸徳記』では①御三家②將軍の子息（綱重・綱吉）③越前家直系の光長④越前松平・高松松平⑤会津保科・松江松平という具合に、家門の中に新たな序列が形成されているということになる。新たな序列が誕生した理由は不明であるが、代替わりによって將軍家綱との血縁関係が遠ざかったことに起因するものと推測しておきたい。

(二) 『武家勸徳記』と『土芥寇讎記』

『土芥寇讎記』の時点で姿を消したのは、將軍となった綱吉と天

和元年に改易された光長のみである。その他の大名家はいずれも同じ位置にあり、順序に変化が全く見られない。この両書の関係については後ほど検討することにした。

(三)『土芥寇讎記』と『諫懲記後正』

『諫懲記後正』の段階に至って、大名家の序列は大きく転換する。まず、甲府綱豊が御三家と同一のグループに含まれるようになった。このグループの中で石高によって順序をつけ、同じ石高の甲府と水戸は官位（綱豊は正三位中納言、綱條は従三位宰相）に基づいて甲府を上位としたものと考えられる。あるいは水戸藩は元禄十四年に七万石加封されているため、編纂が開始された時点では二十八万石で甲府の後に位置付けられたのかもしれない。いずれにせよ、甲府の扱いが変わったことは間違いないだろう。なお、最初の総目録では甲府・紀伊・尾張・水戸の順になっている。これが単純なミスなのか、それとも意図的なものなのか気になるところだが、この点について検討を加えることは現時点ではできない。

次に指摘すべきは、家門が特別な位置付けを与えられなくなった点であろう。彼らは前田家以下の一般大名と同じ扱いを受け、それぞれその石高にふさわしい位置が与えられている。

以上の二点はいずれも、それまでの大名家の序列を覆したものと評価できる。現時点では『諫懲記後正』が誰によって、どのような目的で制作されたものなのか明らかではないが、仮にこれが幕府中枢で作成されたものであれば、幕府側から見た大名家の位置付けを示す大変興味深い史料となるだろう。

その他井伊家・蜂須賀家の位置も下がっているが、蜂須賀家については延宝六年（一六七八）に五万石を分知したことが原因と考えられる。ただ、その場合、なぜ石高が下の山内家の次に位置付けられているのかわからない。また、井伊家がこれ以前は両池田家の前に位置付けられていた理由や、新たな位置でもなお藤堂家の上位にある理由も不明である。石高に収斂されない配列論理があるのだ

ろうが、その解明についてはすべて今後の課題というより他ない。

小括

一門及び二十万石以上の大名家の比較検討から、『武家諫忍記』↓『武家勸懲記』・『武家勸懲記』↓『土芥寇讎記』の間には大名家の配列に大きな違いが見られないのに対し、『諫懲記後正』は新たな論理に基づいて配列されていることが明らかとなった。四書の大名家配列の中で最も興味深いのは『諫懲記後正』であるが、『諫懲記後正』の性格解明は本論集の成果を受けての今後の課題とせざるを得ない。本稿の後半では、大名家の配列に全く違いの見られなかった『武家勸懲記』と『土芥寇讎記』の関係について考察することとした。

二 『武家勸懲記』と『土芥寇讎記』の関係

『武家勸懲記』と『土芥寇讎記』の二十万石未満の大名を一覧にしたのが、表二である。こちらの表は、位置が上がった家・下がった家のいずれも網掛けしてある。左側の『武家勸懲記』欄では『土芥寇讎記』の登場番号を右方に記し、『土芥寇讎記』で位置が相対的に上がったものは↑、下がったものは↓で表した。右側の『土芥寇讎記』欄では、『武家勸懲記』からの移動を数字と矢印で表してある。『土芥寇讎記』にしか登場しない家は番号の前に※を付して示した。表から読み取れることを以下に列挙する。

・ 当たり前のことであるが、『武家勸懲記』が基準とする延宝三年（一六七五）から『土芥寇讎記』が基準とする元禄三年（一六九〇）の間に除封された藩は除かれている。

・ 位置が二、三上下する家がちらほら見られる。彼らは『土芥寇讎記』各巻の冒頭または末尾に当たっていることから、『武家勸懲記』をベースに『土芥寇讎記』を作成した際に何らか手違いで巻頭・巻末に記さざるを得なかったか、あるいはスペースの関係上位位置をずらした可能性が高い。

『武家勸懲記』卷第十・第二十八は卷ごと位置が移っている。
『武家勸懲記』卷第十については、「卷第十」ということで誤って『土芥寇讎記』卷第十に入ったものと推測される。『武家勸懲記』卷第二十八の方は飛ばしてしまったために『土芥寇讎記』では卷第四十一に持つてこざるを得なかったのではないか。卷第二十八のうち、松平頼元だけは『土芥寇讎記』卷第三十に入ったため、元の位置に残っているのだろう。延宝三年以後に新封された者たちは『土芥寇讎記』末尾にまとまっている。

大幅に位置が下がった164本多利長・185鳥居（忠英）・195永井尚員（いずれも『土芥寇讎記』の番号）は減封の結果が反映されている。各家とも卷三十三・三十六・三十七の巻末に位置付けられていることから、全大名の中で正確に位置付けたというよりも、大体の位置で巻の末尾に押し込まれたのではないか。

石高が増された家の位置変化は見られない。堀田正伸・戸田忠昌・土屋政直・太田資直・土井利房・秋元喬朝ら家綱後期・綱吉前期の幕閣の家であっても、加増後も位置は『武家勸懲記』のままである。除封の家を弾き出す作業に付随して減封の三家も移動されたのに対して、加増のほうは新たな手間になるということそのまま放置されたのだろうか。

『土芥寇讎記』が『武家勸懲記』のフォーマットをそのまま利用していることについては、もはや疑問の余地がないだろう。奥平昌章・大久保忠朝・小笠原長胤・南部重信ら『土芥寇讎記』卷第十の四名は何らかの事情で高い位置に紛れ込んだのではないかと旧稿では推測したが、その理由もこれによってはっきりした。また、綱豊が武鑑に比して低く位置付けられていること・堀田正伸と本多家が石高に見合った扱いを受けていないことも全て説明がつく。それはただ単に『武家勸懲記』の順序をそのまま利用した結果だったのである。したがって、『土芥寇讎記』の大名家配列には綱吉の意図が反

映されているとする旧稿の見解は改めなくてはならない。

こうした関係は、『武家諫忍記』と『武家勸懲記』・『武家勸懲記』と『諫懲記後正』・『土芥寇讎記』と『諫懲記後正』のいずれの間にも見出すことができず。参考までに表三として『武家諫忍記』と『武家勸懲記』の二十万石未満の大名家を上から三十家並べたが、こちらは原型をとどめないほど位置が変化していることが一目瞭然であろう。『武家勸懲記』編纂者が『武家諫忍記』を参照した可能性は十分あるが、『土芥寇讎記』のように枠組みをそのまま転用したとは考えにくい。各書の内容に様々な関連を見出せることはグループ報告で度々指摘されたが、大名家の配列までも踏襲しているのは『土芥寇讎記』のみなのである。

『土芥寇讎記』と他の武家評判記の違いとしてはもう一点、旧稿で指摘したように、側用人の牧野成貞が登場しないことが挙げられる。検討の結果『武家勸懲記』・『諫懲記後正』にはそのような人物は存在しないことが判明し、『土芥寇讎記』という書物の独自性を裏付けることとなった。

以上の点から、『土芥寇讎記』が『武家勸懲記』・『諫懲記後正』とは異なる編纂事情・過程を経て成立したと考えることができるのではないだろうか。『土芥寇讎記』はこれまで、元禄期の大名を検討する上で貴重な史料として利用されてきた。しかし実は大変特異な史料である可能性が浮上した以上、今後はまず史料の性格の再検討から始める必要があるだろう。

おわりに

『土芥寇讎記』と武鑑における大名家の配列を比較検討した旧稿に引き続き、本稿では武家評判記間での大名家の配列を検討した。その結果、『諫懲記後正』では全く異なる配列がなされていること、『土芥寇讎記』は『武家勸懲記』の配列をそのまま踏襲していることが明らかとなった。

牧野成貞が『土芥寇讎記』編纂に関与したと考えられること⁽³⁾、写本が出回らずその存在が秘されたとみられることなど、『土芥寇讎記』には綱吉政権中枢部との関係を疑わせる点が多い。『土芥寇讎記』には他の武家評判記に比して政道関係を中心に追加された情報が多いと第二回矢森報告で指摘されているが、この点も政権内部の人間の関与を示しているように思われる。果たして『土芥寇讎記』編纂事業は牧野成貞の個人的な動機によるものなのか、それとも綱吉政権が全面的に関与しているのか。さらには、『土芥寇讎記』が幕政に影響を与えることはあったのか。今後はこうした疑問に答えるべく、『土芥寇讎記』の世界へと分け入っていかねばならない。

【注】

(1) 『武家諫懲記』は刈谷市立図書館村上文庫所蔵本も参照した。こちらには加賀市立図書館聖藩文庫所蔵本（以下、聖藩本）から代替わりした人物が数名取り上げられており（松平光晟↓松平綱晟、松平忠義↓松平豊昌など）、同一人物でも記載内容は異なっている（興味深いことに、後者では尾張義直の項に「薨シ給フトイヘトモ」とある。前者のフォーマットをそのまま利用したために死去した人物も立項されているのだろうか）。したがって、『武家諫懲記』の内容を検討する際には両書を別物として扱うのが適切だろう。本稿の課題である大名家の配列には違いが見られないことから、ここでは聖藩本のみを取り上げることとした。

(2) 『武家勸懲記』はこの他に国立公文書館所蔵本（以下、公文書館本）・刈谷市立図書館村上文庫所蔵本（以下、村上本）も参照した。公文書館本は他の二書で巻第三十に該当する巻が欠巻で、本来巻第三十九であったものが巻第三十として収録されている。そのため、公文書館本は巻第三十八までしか存在しない。公文書館本が正本ではなく写本なのは間違いないだろう。『武家諫懲記』と同様、『武家勸懲記』も諸本の間には記載内容に違いが見られ、例えば巻第一の尾張光友の場合、本文の評の「義アツク」という表現は盛岡中央

公民館所蔵本（以下、盛岡本）のみ、「邪曲佞忿驕慢ナル事曾テナク」という表現は公文書館本と村上本にしか現れない。さらに「愚評」部分でも、結びが「善将ト褒称セシムヘキ者也」（盛岡本）、「善将ト云ヘキノミ」（公文書館本・村上本）という具合に異なっている。ここから盛岡本と公文書館本・村上本という二つの系統があることが指摘できるが、次の紀伊光貞は本文の評・「愚評」ともほぼ同内容であり、それぞれの系統が評を書き下ろしたものでないらしい。更なる検討が必要であるが、本稿の課題からは外れることから、この点は指摘をしないとどめる。大名家の配列については盛岡本・村上本の間には違いは見られなかった。

(3) 元禄三年の松会版『本朝武系当鑑』（深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府大名武鑑編年集成』第三巻、東洋書林、一九九九年所収影印本）には登場するのに『土芥寇讎記』には登場しない人物は十七名存在する。そのうち十名は新規取立（松平義行・松平義昌・松平頼雄・松平直興）あるいは分知（松平乗昌（忠尚）・本多忠恒・酒井忠寛・酒井忠重・戸田氏広・板倉重清）によって『武家勸懲記』完成後に成立した支藩で、『土芥寇讎記』編纂者は何らかの理由で彼らを追加しなかったらしい。残る七名のうち、大久保忠高・稲垣重頼は京都所司代だったために『土芥寇讎記』には立項されなかったと考えられる。菅沼定実は譜代大名に準ずる家格の交代寄合ということで『土芥寇讎記』では取り上げられなかったのだろう（菅沼家は元禄十五年の武鑑には登場しない）。最後に残るのは牧野成貞と植村家智（忠朝）である。植村忠朝は大番頭を務め、天和二年（一六八二）に二千石を増加されて大名に取り立てられているが、彼が『土芥寇讎記』に登場しない理由は詳らかでない。

(4) 『武家勸懲記』は延宝三年刊、経師屋加兵衛版『江戸鏡』（深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府大名武鑑編年集成』第二巻、東洋書林、一九九九年所収影印本）、『諫懲記後正』は元禄十四年の武鑑を参照できなかったことから元禄十五年刊、松会三四郎版『本朝武

林系祿凶鑑』(深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府大名武鑑編年集成』第五卷、東洋書林、一九九九年所収影印本)と比較した。なお、『武家諫忍記』は成立時期が特定できていないため武鑑との比較は行っていない。

(5) 『土芥寇讎記』の大名の配列には綱吉の意図が反映されているとの旧稿の見解は改めねばならないが、牧野成貞が編纂に関与していたという点については取り下げなければならない理由をこれまでに見出していない。あくまで推測であり、具体的な証拠があるわけではないが、状況証拠は牧野の関与を示しているように思われる。

表一 武家謙忍記・武家勸懲記・土芥冠繼記・謙懲記後正大名一覽(家門及び二十万石以上)

武家謙忍記	武家勸懲記	土芥冠繼記	謙懲記後正
1 尾張大納言源義直卿 名古屋61万9500石	1 尾張中納言源光友卿 名古屋61万9500石	1 尾張大納言源光友 名古屋61万9000	1 尾張中將源吉通卿 名古屋61万9500
2 同中納言源光義卿	2 紀伊中納言源光貞卿 和歌山55万5000石	2 紀伊大納言源光貞 和歌山55万5000	2 紀伊中納言源綱教卿 和歌山55万5000
3 紀伊大納言源頼宣卿 和歌山55万5000石	3 水戸宰相源光圀卿 水戸28万石	3 水戸中納言光圀卿 水戸28万石	3 甲府中納言源綱豊卿 甲府35万石
4 同常陸助宰相光貞卿			
5 水戸中納言源頼房卿 水戸28万石			
6 同姓宰相源光圀(マツ)			
7 左馬頭源綱重卿 在所未定15万石	4 甲府宰相源綱重卿 甲府25万石	4 甲府宰相綱豊卿 甲府35万石	4 水戸宰相源綱條卿 水戸35万石
8 右馬頭源綱吉卿 同上	5 館林宰相源綱吉卿 館林25万石	⇒延宝8年將軍就職 ⇒天和元年改易	
9 保科肥後守源正之 高津23万石	6 松平越後守源光長 高田26万石余	5 松平兵部大輔源昌 福井25万石	
10 松平越前守源光長 高田25万5000石余	7 松平兵部大輔源昌親 福井52万5200石	6 松平讃岐守源頼常 高松12万石	
11 松平越前守源光通 福井52万5200石余	8 松平讃岐守源頼常 高松12万石	7 保科肥後守源正信 高津23万石	
12 松平出羽守源直政 松江18万6000石余	9 保科筑前守源正経 高松12万石	8 松平出羽守源綱通 松江18万6000石	
13 松平右京大夫源頼重 高松12万石	10 松平出羽守源綱周 松江18万6000石余	9 松平加賀守源綱 金沢120万5000石	
14 松平犬千代丸菅原(後号綱利) 金沢120万5000石	11 松平加賀守菅原綱利 金沢120万5000石	9 紀 金沢120万0050石	5 加賀宰相菅原綱紀 金沢120万1700石
15 松平陸奥守藤原忠宗 仙台62万石余	12 松平陸奥守藤原綱基 仙台60万5000石余	10 松平陸奥守藤原綱 仙台62万石	6 松平薩摩守源綱貴 鹿兒島72万3000
16 松平大隈守源光久 鹿兒島65万5600石	13 松平大隈守源光久 鹿兒島65万5600石	11 松平薩摩守源綱貴 鹿兒島72万9000	7 松平陸奥守藤原綱村 仙台62万5000石
17 細川六丸源氏(後号綱利云) 熊本54万石	14 細川越中守源綱利 熊本54万石	12 細川越中守源綱利 熊本54万5000石	8 細川越中守源綱利 熊本54万石
18 松平右衛門左源光之 福岡52万3000石余	15 松平右衛門左源光之 福岡52万3000石余	13 松平肥前守源綱政 福岡52万3000石	9 松平肥前守源綱政 福岡42万3000石
19 松平安藝守源光晟 広島37万6500石余	16 松平安藝守源綱長 広島42万6500石	14 松平安藝守源綱長 広島42万6500石	10 松平安藝守源綱長 広島37万6500石
20 松平大膳大夫大江綱 萩36万9400石余	17 松平大膳大夫大江綱 萩36万9400石余	15 松平長門守大江吉就 萩36万9400石	11 松平大膳大夫大江吉廣 萩36万9400石
21 松平丹後守藤原光茂 佐賀35万7000石余	18 松平丹後守藤原光茂 佐賀35万7000石余	16 松平丹後守藤原光 佐賀35万7000石	12 松平信濃守藤原綱茂 佐賀35万7030石
22 井伊玄蕃頭藤原直隆 彦根30万石	19 井伊掃部頭藤原直澄 彦根30万石	17 井伊掃部頭藤原直 彦根30万石	13 松平伊予守源綱政 岡山30万石
23 松平新太郎源光政 岡山31万石	20 松平伊予守源綱政 岡山31万5000石	18 松平伊予守源綱政 岡山31万5000石	14 松平右衛門督源吉明 鳥取30万石
24 松平相摸守源光仲 鳥取32万石	21 松平相摸守源光仲 鳥取32万石	19 松平伯耆守源綱清 鳥取32万石	15 井伊兵助藤原直通 彦根30万石
25 藤堂大寺頭藤原高次 阿野津32万3900石	22 藤堂和泉守藤原高久 安濃津30万石余	20 藤堂和泉守藤原高 安濃津30万石	16 藤堂和泉守藤原高久 安濃津31万3900
26 松平阿波守源光隆 徳島25万7000石	23 松平阿波守源綱通 徳島25万7000石余	21 松平淡路守源綱矩 ⇒寛文4年15万石に減封	17 松平兵衛太輔源豊明 福井25万石
27 上杉播磨守藤原實勝 米沢30万石			
28 松平土佐守藤原忠義 高知20万2600石	24 松平土佐守藤原豊昌 高知22万2600石余	22 松平土佐守藤原豊 高知22万2600石	18 松平肥後守源正信 若松23万石
29 佐竹修理大夫源義隆 秋田20万5000石	25 佐竹右京大夫源義處 秋田20万5800石	23 佐竹右京大夫源義 秋田20万5800石	19 松平土佐守藤原豊房 高知20万2600石
30 有馬松千代源氏(後謙頼利) 久留米21万石	26 有馬中務大輔源頼元 久留米21万石	24 有馬中務太輔源頼 久留米21万石	20 松平淡路守源綱矩 徳島20万7000石
			21 佐竹右京大夫源義處 秋田20万5800石
			22 有馬中務太輔源頼元 久留米21万石

注 網掛けは先行書から位置が下がった家

武家勸懲記			土芥寇讎記		
番号	巻	名前	番号	巻	名前
27	6	森伯耆守源長義	25	10	奥平美作守平昌章
28	6	上杉弾正大弼藤原綱憲	26	10	大久保加賀守藤原忠朝
29	6	榊原熊之助源氏	27	10	小笠原修理大夫源長胤
30	6	松平大和守源直矩	28	10	南部大膳大夫源重信
31	7	松平下総守源清良	29	11	森美作守源長成
32	7	松平淡路守源定直	30	11	上杉弾正大弼藤原綱憲
33	7	小笠原遠江守源忠雄(盛岡本総目録・村上本長真)	31	11	榊原虎之助[源]勝乘
34	7	酒井左衛門尉源忠治	32	11	松平大和守源ノ直矩
35	7	酒井雅楽頭源忠清	33	12	松平下総守[源]忠弘
36	7	酒井修理大夫源忠直	34	12	松平隠岐守源貞直
37	8	本多中務少輔藤原政長	35	12	小笠原遠江守源忠雄
38	8	松平越中守源定重	36	12	酒井左衛門尉源忠直
39	8	丹羽左京大夫藤原光重	37	13	酒井河内守源忠明
40	8	立花左近将監源直廣(盛岡本総目録・村上本直茂)	38	13	酒井鞆負佐源忠門
41	8	戸田左門藤原氏包	39	13	本多中務太輔藤原政武
42	8	本多下野守藤原忠平	40	13	松平越中守[源]定重
43	9	松平大蔵太輔菅原利重	41	14	丹羽若狭守藤原長次
44	9	水野美作守源勝慶	42	14	立花飛驒守源鑑茂
45	9	真田伊豆守滋野信房	43	14	戸田采女正藤原氏定
46	9	稲葉美濃守越智正則	44	14	本多下野守藤原忠平
47	9	阿部対馬守安倍正森	45	14	松平大蔵太輔菅原利秀
48	9	阿部播磨守安倍正能	46	15	水野美作守源勝慶
49	10	奥平小次郎平氏	47	15	真田伊豆守茲野信房
50	10	大久保出羽守藤原忠朝	48	15	稲葉丹後守越智正通
51	10	小笠原内匠頭源長勝	49	15	牧野駿河守源忠郷
52	10	南部大膳亮重信	50	16	阿部豊後守正武
53	10	永井信濃守大江尚長	51	16	阿部対馬守正森
54	10	牧野老之助源氏	52	16	松平伊豆守源信輝
55	11	松平伊豆守源晴綱	53	16	中川佐渡守源久恒
56	11	中川佐渡守源久恒	54	17	松平飛驒守菅原利明
57	11	松平飛驒守菅原利明	55	17	本多隠岐守藤原康慶
58	11	本多兵部少輔藤原康将	56	17	伊達遠江守藤原宗利
59	11	伊達遠江守藤原宗利	57	17	鍋嶋紀伊守藤原直頼
60	11	鍋嶋加賀守藤原直能	58	17	水野隼人正源忠直
61	12	水野隼人正源忠直	59	18	土井周防守源利益
62	12	土井周防守源利益	60	18	内藤能登守藤原義孝
63	12	内藤左京亮藤原義概	61	18	松平主殿頭源忠房
64	12	松平主殿頭源忠房	62	19	戸沢能登守平政条
65	12	戸澤能登守平乘盛	63	19	松浦壱岐守源任
66	12	松浦肥前守源鎮信	64	19	松平日向守源忠之
67	13	松平日向守源信之	65	19	石川主殿頭源昌勝
68	13	石川主殿頭源昌勝	66	19	安藤対馬守源重治
69	13	安藤対馬守源重貞	67	19	相馬弾正少弼平昌胤
70	13	松平丹波守源光永	68	20	松平丹波守源光永
71	13	京極備中守源高豊	69	20	京極備中守源高豊
72	13	相馬出羽守平信胤	70	20	本多出雲守藤原政利
73	14	本多出雲守藤原政利	71	20	松平原次郎源
74	14	松平和泉守源乘久	72	20	浅野内匠頭源長矩
75	14	仙石越前守藤原政明	73	20	岡部美濃守藤ノ宣就
76	14	浅野又一郎源氏	74	20	脇坂淡路守藤原安照
77	14	岡部内膳正藤原行隆	75	20	仙石越前守源政明
78	14	脇坂中務少輔藤原安吉	76	21	伊東出雲守藤原祐実
79	15	伊藤出雲守藤原祐實	77	21	鍋嶋撰津守藤原直久
80	15	鍋嶋撰津守藤原直之	78	21	松平周防守源康賛
81	15	松平周防守源康長	79	21	稲葉右京亮越智景通
82	15	稲葉右京亮越智景通	80	21	松平若狭守源直明
83	15	松平但馬守源直富	81	21	松平中務太輔源昌勝
84	15	松平中務大輔源昌勝	82	21	秋田信濃守安倍ノ輝季
85	16	本多越前守藤原利長	83	22	松平豊前守源信茲
86	16	秋田安房守安倍盛季	84	22	黒田甲斐守源長重
87	16	松平主膳正源信利	85	22	浅野式部大輔源長照
88	16	黒田甲斐守藤原長重	86	22	藤堂佐渡守藤原高通

武家勸懲記の巻10

二つ↑
上下逆

二つ↑

三つ↓

武家勸懲記		土芥寇讎記	
番号	巻 名前	番号	巻 名前
89	16 浅野式部少輔源長吉	87	22 加藤遠江守藤原泰実
90	16 藤堂佐渡守藤原高通	88	22 青山下野守豊(藤力)原忠重
91	17 加藤遠江守藤原泰貞	89	22 溝口信濃守源宣広
92	17 青山因幡守菅原宗俊	90	23 内藤紀伊守藤原信勝
93	17 溝口信濃守源宣廣	91	23 水野右衛門大夫源忠春
94	17 内藤紀伊守藤原信重	92	23 井上中務少輔源正任
95	17 水野監物源忠善	93	23 有馬左衛門佐藤原永純
96	17 井上相模守源正任	94	23 板倉周防守源重冬
97	18 有馬左衛門佐藤原康純	95	24 水谷出羽守源勝賢
98	18 板倉隱岐守源重常	96	24 本多飛驒守藤原重益
99	18 水谷左京亮源勝宗	97	24 青山播磨守菅原幸明
100	18 本多飛驒守藤原重照	98	24 小出備前守藤原吉之
101	18 青山大膳亮菅原幸利	99	25 津輕越中守藤原信政 三つ↑
102	18 小出備前守藤原吉之	100	25 久世出雲守源重之
103	19 久世大和守源廣之	101	25 土屋相模守源正直
104	19 土屋但馬守源数直	102	25 亀井能登守源茲親
105	19 亀井能登守源茲政	103	25 松平遠江守源忠親
106	19 津輕越中守源信政 99↑	104	25 黒田伊勢守源長清
107	19 松平遠江守源忠親	105	25 小笠原壱岐守源長治
108	19 黒田宮内少輔藤原長寛	106	26 松平駿河守源定信
109	20 小笠原山城守源長頼	107	26 板倉甲斐守源重長
110	20 松平美作守源定時	108	26 松平伊賀守源忠易
111	20 板倉石見守源重通	109	26 毛利甲斐守大江綱元
112	20 松平伊賀守源忠昭	110	26 九鬼長門守藤原副隆
113	20 毛利甲斐守大江綱元	111	26 牧野因幡守源富成
114	20 九鬼和泉守藤原隆仲	112	26 太田摂津守源資直
115	21 牧野因幡守源富成	113	26 永井近江守直只
116	21 太田摂津守源資次	114	26 井伊伯耆守藤原直武
117	21 永井市正大江尚時	115	27 京極甲斐守源高任
118	21 井伊伯耆守藤原直武	116	27 朽木伊予守源植昌
119	21 京極甲斐守源高住	117	27 松平東市正源直次
120	21 朽木伊予守季綱	118	27 諏訪因幡守源忠晴
121	22 内藤和泉守藤原忠勝 延宝8除封	119	27 島津式部少輔久寿
122	22 松平市正源直次	120	27 金森出雲守源頼時
123	22 鳥井兵部少輔平忠常 185↓	121	27 松平左京大夫源頼純
124	22 諏訪因幡守源忠晴	122	27 永井伊賀守大江尚富
125	22 嶋津飛驒守源忠高	123	27 毛利日向守大江元賢
126	22 金森万助藤原氏	124	28 松平上野介源近栄
127	23 松平左京大夫源頼純卿	125	28 織田伊豆守平信武
128	23 永井伊賀守大江尚庸	126	28 田村右京大夫坂上宗永
129	23 毛利日向守大江就隆	127	28 細川丹後守源行孝
130	23 池田豊前守源政周 延宝6除封	128	28 秋月長門守大蔵種政
131	23 酒井日向守源忠能 天和2除封	129	28 堀左京亮藤原直利
132	23 松平上野介源近栄	130	28 伊達宮内少輔藤原宗純
133	24 織田山城守平信尚	131	28 小出伊勢守藤原英利
134	24 田村隱岐守藤原宗良	132	28 木下肥後守豊臣国定
135	24 真田伊賀守滋野氏信 天和元除封	133	29 大村因幡守藤原純長
136	24 細川丹後守源行孝	134	29 九鬼大隈守藤原隆常
137	24 秋月佐渡守大蔵種信	135	29 土岐伊予守源頼隆
138	24 堀丹波守藤原直吉	136	29 木下右衛門大夫豊臣俊長
139	25 伊達宮内少輔藤原宗能	137	29 遠藤岩松藤原()
140	25 山内右近大夫藤原豊直 元禄2除封	138	29 土井式部少輔源利忠
141	25 小出伊勢守藤原吉勝	139	29 小笠原土佐守源貞信
142	25 木下淡路守豊臣利貞	140	30 松平対馬守源昭重
143	25 大村因幡守源純長	141	30 相良遠江守藤原頼隆
144	25 九鬼大隅守藤原隆常	142	30 六郷勝之助藤原政清
145	26 土岐山城守源頼行	143	30 分部隼人正源信政
146	26 木下右衛門大夫豊臣俊長	144	30 植村出羽守源家政
147	26 遠藤備前守藤原常季	145	30 松平刑部太輔頼元
148	26 土井兵庫頭源利長	146	31 堀田下総守紀正仲
149	26 小笠原土佐守源貞信	147	31 土井甲斐守源利治
150	26 戸川縫殿助藤原氏 延宝7除封	148	31 内藤右近大夫藤原政直

武家勸懲記		土芥寇讎記	
番号	巻名前	番号	巻名前
151	27 松平左近将監源忠照	149	31 西尾隠岐守源忠成
152	27 相良遠江守藤原長武	150	31 堀美作守菅原親常 二つ↓
153	27 土屋伊予守源忠利 延宝7除封	151	32 酒井石見守源忠朝
154	27 六郷伊賀守藤原政勝	152	32 池田信濃守源政言
155	27 分部隼人正藤原信政	153	32 毛利駿河守藤原高久
156	27 植村右衛門佐源家貞	154	32 三浦壱岐守平直次
157	28 松平刑部大輔源頼元卿	155	32 増山兵部少輔藤原正弥
158	28 松平播磨守源頼隆卿 223 ↓	156	32 鍋島備前守藤原直条
159	28 織田内記守源信久 224 ↓	157	33 松平備前守源隆綱
160	28 新庄民部藤原直矩 227 ↓	158	33 安倍攝津守安倍信友
161	28 稲垣信濃守源重祥 225 ↓	159	33 石川主水源総茂
162	28 岩城伊予守平重隆 226 ↓	160	33 戸田山城守藤原忠昌
163	29 堀田備中守紀正俊	161	33 南部遠江守源直政
164	29 土井能登守源利房	162	33 土方市正源雄豊 注4
165	29 酒井河内守源忠明 注3	※163	33 森伯耆守源長武 注6
166	29 堀周防守菅原親貞 150 ↓	164	33 本多越前守藤原利長 大幅↓
167	29 内藤右近大夫藤原政直	165	34 宗対馬守平義真
168	29 西尾隠岐守忠成	166	34 丹羽庄之助源氏音
169	30 酒井大学頭源忠朝(村上本忠恒)	167	34 大関大助丹治
170	30 池田信濃守源恒能	168	34 市橋下総守藤原政信 上下逆
171	30 毛利主膳正藤原高重	169	34 秋元但馬守藤原喬朝
172	30 三浦志摩守平安次	170	34 阿部伊予守阿部正春
173	30 増山兵部少輔藤原利順	171	34 内田出羽守藤原正衆
174	30 鍋嶋備前守藤原直朝	172	35 細川玄蕃允源興英
175	31 松平備前守源隆綱	173	35 池田丹波守源政倫
176	31 安倍丹波守藤原信之	174	35 米津出羽守藤原正盛
177	31 石川若狭守源総良	175	35 保科兵部少輔源正祥
178	31 戸田伊賀守藤原忠次	176	35 渡辺主殿源基綱
179	31 南部遠江守源直政	177	35 片桐主膳正源貞房
180	31 土方河内守源雄次 貞享元除封	178	35 京極主膳正源高明
181	32 宗対馬守平義真	179	36 五島佐渡守平盛備
182	32 丹羽式部少輔藤原氏純	180	36 太田原備前守丹治典清
183	32 大関信濃守平増栄	181	36 久留島信濃守越智通清
184	32 秋本摂津守藤原喬朝 169 ↓	182	36 三宅出羽守藤原康親
185	32 市橋下総守藤原政信 168 ↑	183	36 小堀和泉守藤原政恒
186	32 阿部伊予守安倍正春	184	36 井上筑後守源政蔽 一つ↓
187	33 内田出羽守藤原正衆	185	36 鳥井播磨守平 大幅↓
188	33 細川豊前守源興隆	186	37 遠山和泉守藤原友春
189	33 池田丹波守源政倫	187	37 一柳土佐守越智末朝
190	33 米津出羽守藤原田盛	188	37 伊東信濃守藤原長貞
191	33 保科越前守源正景	189	37 堀長門守藤原直雪
192	33 松平山城守源重治 貞享元除封	190	37 前田宮内菅原利広
193	33 渡辺越中守源正綱	191	37 山口修理亮多々良重国
194	33 片桐主膳正源貞元	192	37 青木甲斐守丹治重正
195	33 京極備後守源高明	193	37 堀飛騨守藤原直良
196	33 桑山修理亮藤原一玄 天和2除封	194	37 伊丹大隈藤原勝政
197	34 加々爪甲斐守藤原直澄 天和元除封	195	37 永井靱負大江尚貞 大幅↓
198	34 五嶋淡路守平盛勝	196	38 板倉百助源重同
199	34 太田原山城守源高清	197	38 森川出羽守源重信
200	34 久留嶋信濃守源通清	198	38 屋代越中守源忠至
201	34 土方備中守源豊雄 注4	199	38 高木大学源正豊
202	34 三宅隼人正藤原康勝	200	38 建部内匠頭源正吉
203	34 堀市正藤原通周 延宝7除封	201	38 谷出羽守源衡広
204	34 那須遠江守藤原資国 貞享4除封	202	38 小笠原備中守源長元
205	34 井上筑後守源政清 184 ↓	203	38 松平美作守直能
206	34 小堀和泉守藤原正延(盛岡本総目録・村上本正貞)	204	39 酒井勝之助源忠純
207	35 遠山五郎八藤原氏	205	39 牧野遠江守源康通
208	35 一柳対馬守源直好	206	39 松平佐渡守源忠充
209	35 伊東信濃守藤原長貞	207	39 本多長門守藤原忠利
210	35 堀長門守藤原職矩	208	39 西郷若狭守源延貞
211	35 前田右近大夫菅原利豊	209	39 織田源十郎平秀親
212	35 山口修理亮多々良弘隆	210	39 北条伊勢守平氏治

武家勸懲記			土芥寇讎記		
番号	巻	名前	番号	巻	名前
213	35	青木甲斐守丹治重正	211	39	立花主膳正藤原種明
214	35	土井信濃守源利尚	212	39	本多弾正少弼藤原忠晴
215	35	堀飛弾守藤原直良	213	40	小出大隈守藤原有重
216	35	伊丹大隅守藤原勝政	214	40	加藤佐渡守藤原明英
217	36	板倉伊予守源重形	215	40	織田内匠頭平長根
218	36	森川出羽守源重信	216	40	一柳兵部少輔源直治
219	36	屋代越中守源忠至	217	40	本多肥後守藤原政貞
220	36	高木勘解由源氏	218	40	加藤右京藤原泰忠
221	36	建部内匠頭源政吉	219	40	遠山主殿頭藤政亮
222	36	有馬伊予守源豊範	220	40	毛利権三郎大江元平
223	36	谷出羽守藤原衡廣	221	40	柳生帯刀藤原宗長
224	36	小笠原備後守源長貞	222	40	堀田豊前守紀正国
225	36	佐久間備中守平勝豊	223	41	松平播磨守源頼隆
226	36	松平頼母助源氏	224	41	織田内記平信久
227	37	酒井越前守源忠栄	225	41	稲垣和泉守源
228	37	牧野遠江守源康道	226	41	岩城伊予守平伊隆
229	37	松平佐渡守源良尚	227	41	新庄主殿藤原直智
230	37	本多長門守藤原忠利	228	42	松平壱岐守源仲純
231	37	溝口伊予守源政勝	229	42	細川采女源
232	37	西郷若狭守源延員	230	42	蜂須賀飛騨守源正武
233	37	織田信濃守平秀一	231	42	佐竹壱岐守源義和
234	37	北条伊勢守平氏治	232	42	関大蔵源長原
235	37	立花主膳正源種重	233	42	森対馬守源長俊
236	37	本多弾正少弼藤原忠晴	※234	42	柳沢出羽守源保明
237	38	小出大隅守藤原有重	※235	42	本庄因幡守藤原宗資
238	38	加藤内蔵頭藤原明友	※236	42	松平安房守源信孝
239	38	織田主殿助平長興	※237	42	石川吉十郎源乗紀
240	38	一柳山城守源直治	※238	42	松平縫殿頭源乗盛
241	38	本多肥前守藤原政貞	※239	42	本多紀伊守藤原正乗
242	38	加藤織部正藤原直泰	※240	42	堀田伊豆守紀正虎
243	38	遠山主殿頭藤原政亮	※241	42	堀田兵部少輔紀俊安
244	38	毛利刑部少輔大江元知	※242	42	松平次郎四郎源(信之)
245	38	柳生対馬守菅原在宗	※243	42	松浦織部源昌
246	38	堀田豊前守紀正職			
247	39	松平撰津守源義行卿			
248	39	松平出雲守源義則卿			
249	39	松平壱岐守源仲村			
250	39	細川若狭守源利重			
251	39	嶋津内匠頭源久住			
252	39	蜂須賀飛騨守源至照			
253	39	佐竹左近太夫源義知			
254	39	関備前守源長政			
255	39	森対馬守源長則			
256	39	黒田平八郎源氏			
257	39	浅野大介藤原氏			
258	39	毛利千之助大江氏			
259	39	毛利熊之助大江氏			

武家勸懲記の巻28(細かい異同)

武家勸懲記後に新封

注1 網掛けは位置に変化の生じた家
 注2 ※は土芥寇讎記にしか現れない家
 注3 忠明は忠清長男。天和元年に父の遺領を継ぐ
 注4 武家勸懲記187の土方雄次(陸奥窪田藩)は貞享元年に除封となるが、武家勸懲記201の土方豊雄(ママ、伊勢菰野藩)が土芥寇讎記では土方雄次の位置に入っている
 注5 武家勸懲記巻39の巻頭に「従是未万石已上内證之配分或兼備之将也」とある
 注6 貞享3年に兄の子長成に家督を譲り、隠居して2万石を領す

表三 武家諫忍記・武家勸懲記大名一覧(二十万石未満上位三十家)

武家諫忍記			武家勸懲記		
番号	巻	名前	番号	巻	名前
31	4	森内記源長次	27	6	森伯耆守源長義
32	4	松平式部大輔源忠次	28	6	上杉弾正大弼藤原綱憲
33	4	松平大和守源綱隆	29	6	榊原熊之助源氏
34	4	本多内記藤原政勝	30	6	松平大和守源直矩
35	4	松平下総守源清良	31	7	松平下総守源清良
36	4	松平隠岐守源定行	32	7	松平淡路守源定直
37	4	小笠原右近将監源忠直	33	7	小笠原遠江守源忠雄(盛岡本総目録・村上本長真)
38	5	酒井左衛門尉源忠治	34	7	酒井左衛門尉源忠治
39	5	酒井雅楽頭源忠清	35	7	酒井雅楽頭源忠清
40	5	酒井修理大夫源忠直	36	7	酒井修理大夫源忠直
41	5	阿部伊予守安倍利重	37	8	本多中務少輔藤原政長
42	5	立花左近将監源直茂	38	8	松平越中守源定重
43	5	本多能登守藤原忠義	39	8	丹羽左京大夫藤原光重
44	5	奥平美作守平忠昌	40	8	立花左近将監源直廣(盛岡本総目録・村上本直茂)
45	6	松平越中守源定重	41	8	戸田左門藤原氏包
46	6	丹羽左京大夫藤原光重	42	8	本多下野守藤原忠平
47	6	南部山城守源重直	43	9	松平大蔵太輔菅原利重
48	6	戸田采女正藤原氏信	44	9	水野美作守源勝慶
49	6	土井大炊頭源則重	45	9	真田伊豆守滋野信房
50	6	水野日向守源勝貞	46	9	稲葉美濃守越智正則
51	6	松平淡路守菅原利次	47	9	阿部対馬守安倍正森
52	6	堀田上野介正信	48	9	阿部播磨守安倍正能
53	6	永井信濃守大江尚政	49	10	奥平小次郎平氏
54	6	京極丹後守源高国	50	10	大久保出羽守藤原忠朝
55	6	真田右衛門滋野信房	51	10	小笠原内匠頭源長勝
56	7	稲葉美濃守越智正則	52	10	南部大膳亮重信
57	7	小笠原信濃守源長次	53	10	永井信濃守大江尚長
58	7	大久保加賀守藤原秀任	54	10	牧野老之助源氏
59	7	阿部豊後守安倍忠秋	55	11	松平伊豆守源晴綱
60	7	中川山城守源久清	56	11	中川佐渡守源久恒

注 位置が下がった家のみ網掛けを施した